御湯・四十

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

紫乃色ハたくひなき御みちに侍とおほしく
なりけるにこゝにはかくれ給ひて年久しく
数ゝハともしくしてあり禄と年月をおくりし
むかしの事なれハ侍る所への事なり申さうね
給つるを院おもひしなけく事の給りまして
まてしはなくれきゝて給ふしに年をいとへしう人
見おもひつり身つらさの悩さいさゝ世に付
あまりかくうきの所はつ見てゐる事はゝ見
いかなる上けはかゝ給りの事はてゝなゝめなり
清命さしおかいそれかと年月の以来りのにけれ
000583950 1

まことにはかなき世なれは人の身のうへそ人にまかせぬ
此中にも物哀をおもはされは後の世は夢なれ
とたゝうき身事にておもはく世をさとり給へはいそ
なき御あとをとひ給ひて思ひしもかく侍るも
命の程はたのみなきを待にかねてたゝゆくゑ
すゑおもひしの程をも行すゑにきて給へす
後の世は我身のためにも志のおもひはなきは也けれは
く様に語りつゝ給ひつかせて見るほとに
おもひ給へはいつまてと思はせて見ゆる家
をおもひはなちかはかりなる此世を捨て見んとは

おもひ出てこそ有為の世をはおもひしる比は此
をも空んと契りかはしきて給へは涙に袖
給ひ洋なきてとしてみつゝも給ひけはと月
山里にて弥陀仏をあふきつゝあかすまにか
てらの前も仏まへなりし事も悲しと思ひ侍りけ
さりまくはたのみける身を流すなるへき所
法を給ひては仏も尊く行はせ給ひしを
ゆきても思ひきゝたまはすそくつゆく
山林の中にこもりゐてをくおもひしこと
後の世に夢をかなへき思ひのまゝにみたる

無う色をとらす人ゝてまし出よりはくさゑれ給ふ女人
ゆしなりはゆかりしはくいふ心をも川におはしたて
也けれさ海あれくおかいの身の中より御ゐん年よりの
てそ女君いろなりし人ともにまさて給ふ我身
以てとりもつまがりの海しきなるとうしなりなり
さくおかいを遠なり年比のよしかやなりて
せさり給ふ法花経五部いそぎ急し
給我しもとおかいとも二条院にてそし給ふ七ゝ
僧の布施ならさにしく給ひ布す地の御いのり
よりあしそ身よりいでて給ひなし

大かく何年も経といへとも身のまゝにてとせ
也かりしかはしく身さ海にきこて何とき給
ふさりけるに女乃以のを紀てまし此かり悔しく私
此みかは涙へも忍給ふの比色乃ほとき院
いとゝ見まつりなからも見なまりに給ふく只大かく此御
あつひなにか此年けりとも思ひいとゝ給ませ
給ひなり其人某人あま此年は若君つきて
川のまつり給ふ月春宮おやしともとして
なりてちうりこしりみをてきやう持相なきと
卅此年をて給ふなる所を紀にて海してき法

せいりそ歩まつるまへにあめふりけれはにこ
ちよき所にてあり川の程ありとく侍て
しく出来しまうけるも守ふ侍らぬもの世
色ふかりの形すやうそう花ちる里とききこ
是し清かく明なるしつゝゐり名はそ
計へしはしとを見棄ておもしますさん名の
ふしはしの上にをりけり水の色は水也しくい
はやふ様もしいさやうし計とへりてつし
多り中よりひの十分自はしほ菖は花は杯て
宗はめし青かくしう給くうり物おとしろく

仏の御弟子の中の上首と申すすさは中にもとき
むさしの所にてありけるあるゆう人のたつを成うし
あらはへしたまひて出るもの毒しさこ
らつとひくふのを實相となくしさ成けり事こ
て志川まり給ふ事とて不思議り出に侍りと
伸してこれ法を如くい行年まつけて事ぞそ
くはこ出りし志の勝在の心を不言してき給て
却かりめこれ有限りてもの給りとてたさて
つまなしき年の所しさ清徳も出りそききせもん
経のこさてしつかをくれなるのさいもうこけるをん

東京大学総合図書館

そのむかし
たきつくる思ひは胸をこかし涙は袖をぬら
し給ひけるけさ程はたちかへる年の初
あはせても涙に袖をぬらしける御身の
うへいとおもしろくかなしく朝あけの給ひけり
すきにしより君ですら花の色にのこと
まりの御きよひのゆくてらしみとり此御ため
絶ぬ言の葉もなくして物の哀れおほし
あさてはらにまつりまいてきこえし
なかにもの由川さるくる物やうふにきこえし

其日御所は内裏へ入の御前にも物のあはれと
も物思はすかはらすおもしろくみえけん故こそ此たひも
あはれ中にも物の哀とをもふてあるあはれふかき給
上下つかさけるに宮つかへのかたしまかりてすゝめしこと
給ひておもひいてしとさも思しなから御心のうち
ともかくも川の上を給はせ思ひしめ給さみなふまいらす
おもひ力給ひけるし君の御心やはかりかたしとおほし給
こ御給ひて年比に清物の哀もふかきことにおもひけり
はるかに給ひて人のいつらも世の中のならひのことなれと
絶の事とし物やかんきて給ひ人をわすれかたく

らむとおほしめすにまことにはかくしたる御さま
しかん人のかたらひ給ひてかくさき給ひまへし
て夏冬のうちにつけてもかなしひ給ふまへにて
御使いと御方人とかなしみたちの方ゑまつりて
もとのやうにさすかに情をかけて給へるくい
猶も人しくと御方へ方の君にはあつかひの心をたて
また我ひとりの御情をも知りかはしとおもひ
はかなけれ作らしく哀しとかくもてなしのきて
うへりぬるをとなりも世の方わかれかんにて
おもしまつ花のかはりのかたらふ

見しかの人の御方よりなつかしうのまゝしくもてなし
ともに中の契りと伝え
むかしひとへ契りいたしたちまひ給はず給ひ
御方のかはりもしきの給ひつゝ御ふみのてんめは
ここにあらせん給ふなどを人おほくたゞ心さすまゝ
とも世の御名をほにも知りあかしと
見て知る人のまへ例の事をもまかりて
ゆかしの人の御方をきくにはそ御心を給はりけり
夏のすまひ居ますはかの御ふみの心なへとてつ
いかめ人の御方しくはかりきぬなるもみ

しかるに御つゝら重一とはいとゝきよ御事に
なり給ひしかはけに又せんかたなく給事は
あるへけれは人々も同しおもひ御なけきをす
なりにけるまゝにきこしめしつけてきこゆ
なし東宮御思ひと見え奉りくせをおしはかりて
中宮この院に御入ありて世給ひんの御事はまた
つきそへられは出なくにけくおもきて給ふ東
らきなとをはいまからう孫とは此世の思ひと見
えて尋ありあかなとせをおほせいはる川に
涙にて物語し給ふいかんとてきて給ふにつけて

それ今の人なと見てこそ東宮に給ひしか
あまたおほしくつろき給ひて人ゝもきこえいはぬ
もの思ひつゝともかくおほして御ふみなとや
ありきて給院にて給ひて二日ひいとひとつねかへ
りこそしつゝあやしさかりてうらやすき御心もえて
わたり給ひおほせられ給ひつゝともおもしたるに
いとけなき東宮の御事を宮にしつゝくはおほし
御てはあはれなるにて世給ひしつゝけむ
きこえんやうにかはゆきとありて給ふとそあはれ
ためしあらはまつる事こそ御前の心よりかはりて給て

日ころけふ志川まゐりたるに物かたりしてきこえてか
たうして給上はこの御中におほしめしてたまはすおほせられ
わかうしけるかほかくれんほとなとの給はは中にさふらふ
こなたへてのよれつ様なる事ありさ波をおほとかなり
中はしめ人の物のかたるをこの給なし
あかけれはたまふかふかはしてたくんしけるかし給か
物をもそ哀いかはしきに志のうみつて宮はらを
見たまひて給てもをかしくれいの御事なしくきこえこ
思ひ給ひなかなかとの給ひなかくわりを思しかの歯
志りなる事にて心にきはつらいかなるかたきかたく

おかしけなるとかくのこと御覧しそとんと思ひて
中宮にも御覧給ひてしけれは給ひいまそかりて御
給ふ事すくせの物のはかなくて御ふみ年比つれなかり
なかきてふ人のさしのよ人事いと御けしき
此人の此人心ゆるしき給はに思ひとゝきてなみ
おほせ事とをりて給ひなる見えとき給ふ
さまにならむとてそ思ふの我物をたにかつり給ふに宮も
わかりこれは御中にいと思しけれてわりこさ給をも
つきれ此えりたはまへなかなり給はく人の事ね
ありいまへのの御心にもいおほしあはれなると

さて姫君はいと恋しかりおほしまさんいはひめうへ
よりも宮よりもけなくそさゆりてあひきこと
こえさせすまいたゝせすいつもしつしかりおほしそ
かなしもりてまゐりし姫つ枝おりけまい
人のこのかの御心いたらぬおもふ御てあり姫君は
さてまするに姫もとし紀貫いとま人たり紅梅と桜
といふ花の枝しおれてみてとて給ひ姫へ御文
かんおりい紅うも薄り姫へときこて姫へいうち
うちつきてひうかと御よりてあさきのおもかけ
それは立ておりしめぐりわさそおもしろきあり

姫へまいに此宮と姫宮と申す見給し姫君まくら
おもく哀まおぼさまさりな枕結つ給て世まり
涙しくなりていつらしいはかなきを恨み事
まてと恨みてすまいはかなとも南にいまおもひ
此ものは宮人へ有枕風の様と扇を見おりて花
すて姫中宮いまさりし姫君もとすなとしこえしい
御返んせよともきこてさほしうおもふせとは御
きやうふてわりし比の月ひの様の御心けり
つけまいはまきこて姫ならまいは物へはしてえま
より姫君様は宮より涙の姫君まろうとまとはけまと

者にみそまへりてかなしとて出れくゝり
世ゝひとひとに世をすみなれて庵せはき
里住居てもくてしもそあてにあ遊ひし来
出と北きり弁けて遊ひりてあそこかり見れけし
きつくるあまりにかしあかくなさくとおかせて
けり中くにし世にれ花乃色ゝともへらまる
しきりきりもれくらて毎けにおもしけるに紙
まていとかりかえて世を心住家にさそはれ
物ゝくさへらしうもて深に物の形見なりき
風もつゝ吹にくたる夕暮に世をさいみ尽とそけり

そくにしも世をかなつるとて院かくり立くみへ本よりはなく
多様いとらく花きなるつゝいこれにあはれて出る旅
くはへらてをこしてけるりしとさてておよ
りけれれを行つ跡て侍とられしと思ひ旅の
にさしこかり見る住て心やるるうつかぶ侍の小舟
流しむしとこそすれもれなかれ
聞くと見し種をけるまでしすまし風の
みなかに萩は世乃為けれやあまし旅とすまくへ
今あゆねまてつゝまいもありにゐへ思ひるなる絵ど
庵しも世いきて此ありそ梅か為の世にまよひもれなれ

られ給へるしるしとて御涙をぬくひ給ふまゝに

かへし給ふ中すの宮

秋の野におきしまゝの露の女郎花の露

此の色と社見しをきこえてさらし給ひ宮しあらん

うきあつまりけむかたへの心のまつ是ありてもろくぞ

なきせをとらくすまさてうなとおもひつゝ是ても心

ありなる御事なるはうけとこそかくなさむと思ひ

かりなりしにいたうせ給ひ給ふこれはいとなさう

なり給へる御心のきはめてあはれなるまとはせ給へ

なさけなりけりやとて見えまし云事ともさく悔し

給ひつゝ涙のつゝ給ひしりしにてたゝかりけりこ見

え給へいはるりきこゆれはことに宮いつみ

とも思へ給はり給へてなくく見なはり給ひ泣とに

なさくれ御房の思ひしてなきりつ見て給へいはす

こきやうなみついひし枕にきこえと立給ひき哉

きありうら給ふきしくいくてい神のたま給へは枕にあひ

て心の思ひとこうひとて来ひと枕く御手を

しはくさせ給へてひてはくらく心そつき枕に

きてそて給は宮もろ給ひてくてらさし

また給ひつるとなりなくきこえす涙しくゆる

ありけれは道すてたくみおつ事ごてもおかさ
し侍るつゝふ候ふしく明倉也長ま御座ふ
給わりし給ふありやゆりしる人相公給ありり
給ふ梅女房なとも給ふ給り給ふ御方らし
さらあし院は御して大河ま志給ふしくさあけ
道は大将殿ちくさいり給ひ候ニ本下也とと
ありよひ世ちまり給ふくかくい波いひ給りれさ波
あしめ候年比乃はいありて心る由とて
給つる年くはきゆこてうるれ思ひいて庭こ
あしめつとく非しこ候ひ給ま給ひて梅女房こ

まちここやうれ儀あまりしみな都やよそさん
なりとゆりこてそうらとまりて物とへこそ
あらしひ女房いしむまき君つらとゝをもゝのは御
し候さいくれらきちのとうてひてふなあこや
とへ二代くしらわらとへ君よし物し給へはつ
御前儀あまりを申りたるなとの給は宗きき
むはらく出かしなすへき道しとはうあれ見ていつ
わさ波てりいたしく为へり孫は家のこまらんを
らのへりまる折しく見んとてまつり給御物のけ
なものこれも人のはつ見てうんとそてくれこ給い

東京大学総合図書館

侍るを御らんやおほしまするらむ御ものいふこそいとく
てもわかいのみちによりて大寺は侍し一日に
参れはいと御心のさまにしこそ侍しもいとはい侍る
かき返し侍るにはいつくしき物のあはれもめりと見えてさせ給ふこ
ほいていかを屋川のさせ給ひてふとめくらし能世の
御覧してもかさせ給へと侍らん祖かるとおほせ人の
くめし心あるにみゐらふて侍る侍へるよし
中納言は此ここにふしより給へ大寺へ侍り候りて
侍りてぬさうしくのそれ人々人々して侍る人
大寺にて此哀れたここなるひ給ふ年比多まや

御やとおほせあるはいなくりしくはいはれ
也世ありしかうしはりにもわ見えたまんなかのふ
とふに大寺のあ年たてむめてさ
わいりけゆ物をおもふかり大寺の世給ふまる
めうまふそおほしめいしも大寺わりにてもい
侍てしひ見えまうしのみさうしける一心をわすれた
いまよりそこ侍るそてうわんとこそつて見へ
給へ給をすまするしくも女御かれおほくきうり侍る大寺
侍るふ世あれ御志ありしと志川なかのなまて侍
また御めうさひらを地の給さきれしま大寺へはけて

見給へはいかのくとゆめりひかりしおもひつゝみけまゐい
はこれおもつきをひとくかつきて見えさせ給ふにつけても
はらけ給へてうくきこえうにこゆるいつかしくおはしまして
しはしの君にこのくきみを給はらせてくしもおはしまして
くるしきのはかなきおもひされぬあはれにつく(?)何事
まくかつらあれとまうせしさまのみけ給はしたら
みはなちとてゆきもとかくありさまにおもひて給(?)あい
福大将の君は涙にむせて見えて涙の
ともかくてもありあはれになく見えさせまゐり中にも宣
かしまてもうまき(?)はのあさきまゐりとにいる(?)ほとにて

しあはれいくれはゞらやらわらうまゐらせ
うかしきをあくはやくとうしてけるうのかた
まてまゐりおもひ火のことかたの御くはしゐとて
志ろく見ゆるやうなくにくきしはまさり給ひて
まゐりしられみゆきてやまゐしはまさに参らせ
ありあさくもかはしてかなしみの御たまはりにあさまし
とこそ給ひありやまかれたまひにかきりにたへ
なさけ見え奉りけり志にいの玉しかのかそこの
いかてもこのあはれなるかたこそはゆかしきの宣
まうやつきまゐらせてひとかたならぬ物思ひ

ゆゝしきなけきは院そ何事もおほしめしわつらはせ給ひた
はさる御事のちにおほやけにもおほしめしなくさめ
御事ともおほしめしいてゝおほす事は
何事もあはれにおほしめしたまひて侍ふかくおほし
いますこしおほしめしいれたまふをきこえて
りさせ給ふをなさけなくおほしたる
くたさるゝたまつりなとしたまひなとこと
つゝましきこと給まつりけるをみたまふ
ゝ心をはけらるゝをさてはなかりけるをさる
いつくおほえたまはぬをなくなりしを

なまてはいとけなきさまにてそ猶なくなりけり
給ひぬるもまたいの事なれと何にかくいふこともなし
あはれにおもひしらるゝ人はかゝりてもおはしけるにて
まつる人ゝにつけてそれてきこゆる事なと物せさせ
ものおもひけるそさへなくなりなりける所をくらし
かいまして夢ちに添をふつかくゝ車より
まうてたちあへきあはれそおほえ
大将の君は御けしき世にゆかしきに時なれのあるまし
おほしなりぬれはさてありてさやかなる月の
かみなりさまかなかしてなし我しれはたらせ給

とひ給へり十四日まて在給ふ八月まては十五日れ
あはれなり日は使にたかやかに河
かりて野への方ゆかれける庵ありて世中
おほしつゝける事を使とてくはしく見ゆなれ
さらともいふ世のはかなき事をおもしさの
庵ある所なりけれはいふさけなくおもひ給
と云よろ紀伊守もものし世にいふ御寝ともなく
河しとし給へりし様なる世の中のそこらの人々
ゝの大将殿もいみしうおほくなり給ふにあるかなる庵
みもまゐりて給へる御事も御方にひ給て公

御しういふさしき御寝しきみかしてとかりよりも
見えんなり給ふる一方なりけれは河のまふて給へは一か
世の中とふく吹夕暮にもの思し此事しかお
てなれいより見えなりし物なとあはれしおほし
給へり又なきり此程の言葉のつゐしせつなと
人まいらせ御方にはさしもなき事とも
けまし人のうへはさしも見えしかつゝてこそ
なれてはひとつ給ふ此秋にも庵さへゆ
うれしさにまとひしてけり給ふの
伊勢の人の秋の夕の恋しきにはさつきみ

えしゆくゑの三身を名付侍へかりけるや
んよりは時分をこそ一ちやうをせしきたらんたつ
念仏をたのみて法花経なとを世にたて給
さくいとなし婦人ともおもさせてこそ
此念のさはりきさらりてゆくへし
給はおんへらぬ峯の行ちさ波あらしつくゐ
つまんする者ゆくのをもちもちて人をも思ひとゝめ
たのみあるいはけなき時にもうれしく
つねなき世界の音たえく仏おのすゝめ給
けうけらをもつらくもとくて川かみなきつるさ

ゆきかひてもあはしかりしともおもはゆゆるかさね
見つかさしにも此世にうくなりて年ふるすみ
のあはてたれしにもおもひよおもひしこそさり
侍る所のたまへしこそはいとくたえさむしろさ
なれおもひそてい祢りんみちぬていかさ
ふやしかなしこそ此念ひとつなのみに
われさ世給ひて何ことも仏を祢んしすり給
所をめりよりひ付きしめすりてれいかさ
うえうりおいあつとていときて給おもし
めしかたのみふいたのまに何年もとめて

見おこせつゝ涙をのこりかゝり給ふ中にも猶
しけきこと人にかけくしく恐ろしき様にて見えつゝ
しも又は我世の事清きことく思ひしにも紀
侍ひて世をしらむとしさにまとひきにとも
きこえきまへん名残おしけれつれうき中と
色ゝ涙の世にはかなけにさはさへ心うきに給ふなれ
しぬおもへ給ふ御心にもさしくく給ふにもあはれに
てくる世なりたにひかく御給人のけはひみせ
給ひの中くらはしく恋しりとけふともあらく
とひきこて給ひし御涙の名残も思ひせ

給ひし比の中そうしとおもひしはけふに
いと物わくしうぬおもふぬ心もおもへしらすて
給ひし人のおもくしく世給ふにけつのかたなき事とも
さる程に世のうつりかはりやそのさへなりかたく
久蓋の給ひし事ぬ今きこえたくさ様
は涙子ぬ給人のかなしそ事わり給ふ心給ふす
こまやかにきこえて給ふことしふ
いかに人の様さへとぬ思ひしとも思ひし
御有様を事その中にも今の心を
おもひ出てもなく何ともなく此様の事にて

なきなかのなかれて涙をけしからぬ人給ふ
まさしきはなし
露路宗さまはもとより京の寺をたて
此はよきつけ寺地のこれも京都の
御寺はまらうどらせ給てさまてもおほく
こと給つ寺だての御住持まいらせやすれ
ありたるとなくの天狗他寺へをいとまい
此くりけふのとくらへつかきて給はす
みともならひもしらいしはつ宿やうはて
まわりをすまさいを井ゆけてかさて

おいぬく弟子くれ寺を孫まいらせにつけ
てこそ此のてきしとかりて人のたかく通し寺
人々ものの俗の御かたきまてもとる人さう
けら申ための志いらく給のさとし行年の
宗でも寺らなかの人々ともて松梅して
つまつらすくしくおりたかりし人の公
ちんありけるしもこの尼寺弟子さまれ
人さへ寺此の風の音もくの声まつ草の涙
おとこれ人いま御てはつかしく見をすりし
人のためくさし御こころもし年比もろまく

つゝしまつりきまてゝ人〻はおもひしも新院の命
こゝろうし昔年と存せし身にて御涙にむせひ給ふ
世の中の心をそむくにおもひかへし給ひけるに
冷泉院殿の言しも色紙の筆をそこた
えすは身をも事にてきこえ給ひて
　王けつの物人とうしもやさ男人の妹に
四国にて御物のこしもしもいかにもさてはうち給ひ
やうとありしかは御物語しこれいとおもひて
おも身くて見給ひ御心にはりうかゝらしされ
此物かりしは世文をのりしそれはしたれとは物か

御のまへ立よりておもひしけしなにて涙の
こほれしを袖のうへに涙をさへて見のやり給ふ
給ひけり小さ雲かゝりしも御身のあはれ
まことの身をもつて御つ物をもをさせしまつりて
と計おほせ給ひておもひ沈みてよるの御はは
これ寺の御物語りの御のほうはいまへ
おもひ給ひ年おもひの涙にそてにあまる
おそれしまます佛の御あはれに人をけかしそ
身をわれこそやかましうひ給ふおもせを
もとの心にもおもひしおもひてなさりける別

東京大学総合図書館

な侍と成給し東宮にさふらひ給ひしにいたうす
時めき給へくは年ころの御心のうち世の人も
ひとへに思ひ聞えける事ともありしを
人きゝはけしからぬ事にもあらす御ありさま
いとめてたう年月をふるまゝにいとゝの御おほえまさる事
ありけるに大将の君の御事にも思ひなりて清
くらう給ひたち宮の御まへにて秋月に
つきひせられ給ひぬるゝはもてなしてつもり
けるも亭にそれに寸中宮となるもはなれぬの
時にそふもむくいひきて給

B 7874

東京大学総合図書館